

プロジェクトによる美術教育からの幼児・児童の支援活動について

古賀市に於ける児童美術展開催を中心とした平成 26 年度の事例

中野 隆二

Support Activities for Children in a Team-based Art Education Project A Case Study of the 26-year-long Heisei Center of Children Exhibition in Koga City

Ryuji Nakano

1. はじめに

子どもの育成のあり方について多方面より要望がある。例えば、将来を担う子どもたちに知識や技能、あるいは心の問題解決などである。このような要望について、本論における記述は、美術を通した支援活動の研究である。支援活動については「古賀アートフレンズ25」という名称で、プロジェクト・チームを結成した。チームの平成26年度の支援活動について、古賀市児童美術展開催を中心に4つの活動事例を報告するものである。

2. 目的と経緯

美術教育の目的は、「美術を通して人間形成」である。これはイギリスのハーバート・リード（Herbert Read, 1893 1968）¹、アメリカのヴィクター・ローエンフェルド（Viktor Lowenfeld, 1903 1960）²が1943年並びに1947年に発表したことから、全世界の美術教育者が注目し、これを教育目標としてきている。

現在使われている「美術の教育」には2つのルートがあり、一つは前者の2人が掲げる「美術を通しての人間形成」である。一方では、役に立つための技術訓練を目的とする美術である。

我が国では、明治時代に於ける最初の学校教育が「臨画」教育、すなわち、手本通りに絵を描くといった、技術訓練から始まっている。大正7年（1918）山本鼎が「自由画教育」を提唱し、「臨画」の排泄を唱え、子どもの絵画のあり方を、子どもの発想による表現が大切ということを浸透させた。昭和の戦争の時代は「お

国のために役に立つこと」ということから、技術重視の「臨画」であった。戦後からの現在の教育は、「人間形成」と「技術訓練」との2つの内容が混乱しており、子どもたちの描画活動の教育のあり方が、幼稚園や小学校では、未だ理解されていないことが多いようである。ここで、理解を求めるならば、『人間形成』は幼児・児童の教育で、「技術」については、中学生以上の教育、そして大人に対するものである。混乱していることは、幼児から「技術」を求める大人が多いということである。具体的にいえば、そのものそっくり描く技量、写実の表現である。

今回の活動においての中心は、岡田茂吉（おかだもきち, 1882 1955）³が設立したMOA美術館の児童作品展を古賀市で独立して展覧会を開催することにある。岡田の信念は、「絵画という活動を通して子どもを育成することにある。」という。これの意思に賛同して、日本各地において、ボランティア・スタッフによる児童の作品展支援活動をしている。全国におけるMOA美術館児童作品展は、平成元年（1988）より行われてきており、全国約500カ所で開催されている。これら地方で開催された児童作品は、優秀であったと審査で認められたものが、全国大会、さらには世界へ子どもの絵を羽ばたかせるという行程である。これは、「子どもたちに自信を与え、生きる喜びをあたえる。」という主旨である。

古賀市では、市在住のボランティア・スタッフがMOA美術館児童作品展を古賀市で独立させたいということから、支援する運びとなっ

た。これまで、古賀市の児童作品は、「福岡市とその周辺の市町」として約10万人の一部であった。現在古賀市は約3,400人の児童がおり、福岡市との共存では、入賞の確立も低く、また全国へ選ばれて行くことが稀である。独立することにより、出品数から規定されている「奨励賞」をもらうことができる。そして毎年、古賀市の児童の作品が全国展で見られることになる。さらに、世界展への発展が児童にとって羽ばたく希望としてでてくる。

以上のことから、この支援活動については多くの人々の協力が必要であるため、組織化を図り、児童美術展開催と幼児・児童のための教室支援をすることである。そこで、子どもの作品によって「元気にする」というキャッチフレーズにより、プロジェクト「古賀アートフレンズ25」を結成することになった。「元気にする」は、子ども、家族・家庭、老人、全部の人々を対象とするものである。

3. プロジェクト・チーム「古賀アートフレンズ25」について

3-1. チーム概要

「古賀アートフレンズ25」の構成は、古賀市民、MOA 美術館ボランティア・スタッフ、Qbicの会、美原園、西鉄バス宗像の5つの団体・企業等で組織化している。ここでいう古賀市民は小学校で支援活動をしている人、所属等ない主婦の人たちである。MOA 美術館ボランティア・スタッフは、MOA 美術館より委託を受け、その称号をもって支援活動をする人たち、Qbicの会は、NPO 法人古賀文化協会に登録している子どものための教室で主に工作や絵の指導にあたる者、美原園は老人ホームである。西鉄バス宗像は古賀市を中心に巡回している業務バス会社であるが、3年前より、古賀市の委託事業として、移動ギャラリーを行っていることから継続である。それぞれ、子どもとの関わりを持っているが、老人ホームに至っては、子どもの絵によって、おじいさん、おばあさんの「元

気をはかる」ことを目的としている。

3-2. 課題と解決策について

近年、我が国の学校教育現場には、不登校をはじめとする学校不適應、いじめや孤立児童問題、さらには授業困難など、学級崩壊に至らないまでも、日々教諭の努力があってもさまざまな課題が増加している。特に小学校の教育現場は、その波及にあると考えられる。古賀市の教育現場もその延長線上にあり、そこには学ぶべき基礎学問、知育や体育、道徳に止まらず、情緒性や共感性の育みとともに心の教育が求められている。

これについて児童の成長、発達における人間形成の基礎を培う時期に、豊かな心、創造性、精神性を育むことであると考ええる。具体的な活動として、小学校の協力を得て、児童や家族を対象に絵画表現活動を奨励し、美の意識を掲げ、支援するものである。児童と家族を対象とする絵画表現活動と児童作品展を市内各所で一年間を通して開催し、作品展開催の地域の人々が鑑賞することによって、児童の情緒性や共感性の励みとなり、心の豊かさを広げていくものと確信する支援活動である。

4. 支援事業の企画と計画

古賀市在住の児童（小学1年生～6年生）と家族、あわせて作品展開催時における地域の鑑賞者を中心に対象として、企画については、以下の内容によって行う。

- ① 古賀市全小学校を対象に協力を経て、児童の絵画活動および作品の出版。
- ② 児童・家族を対象とする絵画表現活動支援（例：絵画教室等を行う）。
- ③ 入選作品の展示会（「サンフレアこが」等、複数会場で入選作品を展示する）。
- ④ 入賞者の表彰および表彰式開催。
- ⑤ 外部協力団体、企業による協賛展示（例：古賀市社会福祉センター「千鳥苑」）。
- ⑥ 児童作品返却（将来へのつながり展望）。

子どものための作品展を開催することに目的がある。

これについて以下の計画である。

- ・事業計画 6月
- ・古賀市8小学校訪問、協力依頼 7月
- ・個人、団体、企業等協賛依頼 7～9月
- ・夏休み工作教室（文化協会主催）7月
- ・舞の里小学校アンビシャス絵画教室 9月
- ・親子で絵画（つながりひろば主催）10月

4 - 2 . 実施体制

実施体制について、以下のように担当を決めている。

事業責任者：安藤照美（団体代表）

絵画・造形表現支援活動担当：中野隆二 他1名

作品募集担当：安藤照美 他3名

表彰式担当：安藤照美 他3名

作品展示担当：サンフレアこが会場 /
安藤照美 他10名
びはらホームこすもす館 /
出口 徹 他3名
西鉄ギャラリーバス /
大庭弘幹 他3名

5 . 事例報告

事例1 . 夏休み工作教室

5 1 1 . 概要

NPO 法人古賀市文化協会主催による子ども夏休み教室において、工作教室を行った。平成26年7月25日、26日の2日間で、担当は「Qbicの会」である。当初の予定では、定員15人の2日間通して、1つの作品を子どもたちに製作させることにあった。文化協会の報告によると、希望者が殺到し、72名の幼児・児童の申し込みがあった。事務局で30人+30人で60名とした。なお、残りの12名は教室に収容できないという理由で、打ち切ったということである。

5 1 2 . 内容

教室の内容は以下の通りである。



図1 . 工作教室風景

- ①教室名：「夏休み工作教室」
- ②期日：平成26年7月25 - 26日
10:00～11:30 1時間30分
- ③場所：古賀市リーバスプラザ研修棟103室
- ②テーマ：「作って、楽しくあそぼう！」
- ③題材：「飛び出す動物さんたち」
- ④参加者：4歳～12歳 60名（2日間）
- ⑤子どもの持参：はさみ、のり
- ⑥準備用具：はさみ、ボンド、ホッチキス、セロテープ、マーカー（10色）人数分自由に貸与
- ⑦材料：両面色違い造形紙、画用紙
全員に無料配布（600円相当）日本色研より材料提供
- ⑧導入：1 . 紙の性質、飛び出す立体原理の説明
2 . 動く、飛び出す動物のしかけの試し作り
B5大の画用紙で「ぱくぱく」「ガウガウ」などを試作。
3 . 自分の楽しい作品作り
カラードフォルムや画用紙を使って、切って、折って、動く。

5 1 3 . 状況

動く作り方の説明では、子どもたち全員が注目して、話を聞いた。試し作りでは歓喜を上げ、遊びながら画用紙を切ったり折ったりなどした。また、これに模様や絵を描いて楽しんだ。自分の作品の仕上げについては時間不足のた



図2．工作教室風景

め、時間内には完成せず、材料と作品の途中を家に持ち帰って作ることにした。

5 1 4．保護者の話

後日、数人の保護者に、子どもの様子を聞くことができた。「大変喜んで帰ってきた。」「家でつづきを作っていた。」「材料をたくさんもらえてよかった。」などであった。

5 1 5．考察

この教室支援では、紙という性質、切る、折るという行為、あるいは、のりやホッチキスなどでつなぎあわせること、さらに、マーカーなどで描くこと、これらの内容を折り込んだ教室としたものである。子どもの成長に必要な行為を織り交ぜたと考える。これらは幼稚園や小学校あるいは家庭で行っていることであるかもしれないが、この教室では、年齢のひらきもあり教育の場とは違った感覚が子どもたちに創造性を駆り立てるきっかけのひとつになったのではないかと考えるものである。この工作教室で考えられたこと、あるいは状況等で聞いたことなどをまとめると、申し込みが予想より多かったということについて、小学校では夏休みに出される宿題が多いということがあり、何か作らなければならないという児童の立場、あるいは作ることが好きだという児童もいるということである。このようなことから垣間見ると、小学校

では工作が、あまり為されていないのではないかと考えらる。

事例2．アンビシャスにおける絵画教室／ 舞の里小学校において

5 2 1．アンビシャスについて

アンビシャスは、青少年育成として位置づけられており、福岡県では知事を本部長として構成されている。その概要は以下のことである。「豊かな心、幅広い視野、それぞれの志を持つ（アンビシャスな）たくましい青少年の育成をめざす福岡県の県民運動です。子どもたちのかけがえのない個性を尊重し、その能力や可能性を伸ばしていくため、地域・学校・企業・個人など、まず大人が意識を変えて、子どもたちのためにそれぞれができることから取り組もうというものです。青少年アンビシャス運動推進本部では、具体的な目標として、3つの原則（青少年アンビシャス運動は『誉めて伸ばそう』『自主的参加』『交流・連携』の3つの原則を前提に推進しています。）を基本にアンビシャスな青少年を育むための7の提案（青少年アンビシャス運動に取り組むにあたっての具体的な目標を提案しています。家庭・地域・学校・企業などで取り組んでほしい7つの提案を目標にそれぞれの実情に合わせて、まずできることから始めましょう。）を挙げています。これらの項目にあてはまる活動を実践しているみなさんにぜひ参加いただき、運動の輪をより大きく広げていきたいと思っています。子どもたちがいきいきと輝く社会を目指して、ともに運動を進めていきましょう。青少年アンビシャス運動は、家庭や地域社会の教育力を取り戻し、すべての青少年が将来への夢を持って新しい時代をたくましく生きていけるように、『豊かな心、幅広い視野、それぞれの志を持つ（アンビシャスな）たくましい青少年の育成』を目指す、プラス志向の県民運動として始まりました。多くのアンビシャスな子どもたちが夢を持ってそれぞれの目標に向かって挑戦し、その子どもたちを支え

るため、地域で大人たちがアンビシャス運動の輪を広げながら活動していくことが、青少年を取りまく環境の改善につながることを期待します。アンビシャス広場は、地域の大人たちが見守る子どもたちの居場所です。放課後や休日、アンビシャス広場に行くと、いろんな年齢の友達や地域の大人の人たちがいて、一緒に遊んだり、話をしたり、学習をしたり、いろんな体験をしたり、さまざまなふれあいをすることができます。地域で遊ぶ子どもの姿を取り戻そう～これが、アンビシャス広場の合い言葉です。」というものである。

(<http://www.ambitious.pref.fukuoka.jp/>より出展)

5 2 2 . 児童の状況

当小学校では、月2回木曜日に活動が行われている。アンビシャスひろば・アンビシャスルームが設けられており、小学校を支援するお母さんたちなど（保護者、卒業生の保護者、地域の人）で行っており、絵本や影絵、簡単なスポーツなど、いろいろなプログラムを組んで、放課後に児童育成として活動している。日頃は6～7名程度の児童が参加している。

5 2 3 . 実践内容

アンビシャスとして行った概要は以下の通りである。

①テーマ：「画用紙に絵をかいてたのしもう！」



図3 . アンビシャスにおける絵画教室1

②期日：平成26年9月4日（木曜日）

授業終了後15：30～17：00

③場所：古賀市立舞の里小学校アンビシャス教室

④参加児童：1年生～4年生 26名

（申込による希望参加）

準備：児童／絵の具セット

配布／画用紙4つ切り、A3サイズの2種類

指導担当は中野、児童支援は安藤とアンビシャス担当の保護者2名が行なった。

5 2 4 . 児童の活動内容

日頃の授業には表現テーマと「めあて」がある。児童は、それに従って活動することが一般的な学校の授業形態である。ここでは日頃の授業と違った、児童とのふれあいを設定したいと考えた。そのことから「画用紙に絵をかいてたのしもう！」とした。これについて、子どもたちは「ほんとうに何を描いてもよいのか」という問いかけが数人あった。画用紙は、児童にとってやや大きい四つ切り（54cm×38cm）とやや小さめのA3（42cm×29.7cm）を準備した。先に、A3を全員に配布して、自由に描くことを示唆した。表現の誘いとして、「もっと大きい画用紙もある」と促したところ、半数の児童は、大きい画用紙がいいと言って、取り替えた。次に、子ども声では「下描きをするのか」「直接絵の具で描いてもよいのか」といった質問もあり、「好きにしていよいよ」と答えた。児童の表現のありかたは、①じっくりと考えて、鉛筆でじっくり描こうとする。そして細かいモチーフを描く。②大胆に絵の具をつけ、直筆する。③筆を使わず、直接絵の具チューブから画用紙へ、さらに画用紙を折って転写（デカルコマニー）をする。といった3通りの表現の仕方が見られた。子どもたちにとって1時間30分という時間が短く感じたのか、制限時間いっぱいを使う児童がほとんどであった。また、仕上がらなかつ



図4．アンビシャスにおける絵画教室2

た子どももいた。絵の具が時間内に乾かないので、作品を預かり、乾かして、後日返却することとした。仕上がっていない子どもの絵については、次回に時間を設けて行うこととした。できた作品は11月に行われる文化祭（フェスタ）に飾られた。（支援スタッフによる）

5 2 5 . 考察

訪問した小学校は、絵を描くことが好きな児童が多いように思われた。そのひとつに、日頃のアンビシャスの参加児童は前記したように、6～7名程度であるという。それにもかかわらず、今回は参加児童が26名という人数であった。次に、表現についての質問が多く、画用紙も大きいものを選ぶ子どもが多く見られた。3つめに、上記したように3つの表現タイプがあり、描かれた作品にそれぞれ児童の個性があらわれた。

このような描画活動を通して、子どもたちが成長活動ににおいて、やる気を起こし、気持ちよく、さらに自信を持って表現活動ができるようになることを確信するものである。

事例3．MOA 美術展開催

5 3 1 . MOA 美術展古賀市児童作品展開催の概要

MOA 美術館の児童作品展は日本全国の地域500カ所で行われており、この地方展の作品を

全国展へ出展し、さらに児童の作品は、全世界へ羽ばたかせている。昨年度まで古賀市の児童作品は、福岡市とその周辺の市町の作品展に出品していたが、出品数も多く古賀市から全国、世界へは、大変厳しい状況下にある。本年度から独立し、古賀市独自の展覧会を開催するに至った。これにより古賀市から、まず日本全国展への切符を手に入れることができ、古賀市の子どもたちの心のこもった作品と自信を日本全国に広め、世界へ羽ばたいてもらいたいという願いがある。

5 3 2 . 主旨

成長期における子どもの造形表現の在り方について、絵画の表現をして、見て、楽しむ、という創作活動を通して、美と表現の喜びを感受し、子どもたちの情操と美意識の涵養を図るとともに、本来の表現を促し、支援すること。そしてこれに関わる家族や友達、周囲の人たち、また作品を鑑賞する人々の喜びや感動をおこし、さらにこれらを充足する機会として提供する。そして美しく生きる人と家庭づくり、さらには心が通い合い支え合う美しい町づくり、地域づくりに貢献することである。

5 3 3 . 活動計画

古賀市児童作品展の計画振興は、以下の通りである。

- ①計画実行のための会議 6月
- ②古賀市8小学校訪問、校長に協力依頼 7月
- ③個人、団体、企業等協賛依頼 7～9月
- ④児童作品提出締め切り、回収 9月22日
- ⑤審査 9月23日
- ⑥図録作成
- ⑦作品展示 10月17日～19日
- ⑧表彰式 10月19日
- ⑨移動展示 10月30日～3月
- ⑩作品返却 3月

以上の内容である。

5 3 4 . 審査について

9月22日に募集の最終締め切りで各小学校へ訪問回収した。児童出品数合計721点であった。小学校によっては、夏休み明けとともに児童に提出させているため、これ以前に回収した小学校もある。

審査は中野、奥山姿子（外部より依頼）を中心として行い、審査内容については、募集案内チラシに次のように明記している。「審査基準の内容　１．感性や創造性豊かに自分で描いた絵　２．心がこもって、たのしく、美しい絵　３．自由な創意・工夫をこらした絵　４．個性的で、子どもらしく明るく、のびのびしている　５．自然や人を思う心のよさが表れている　一口で言えば、心がこもって、子どもらしい個性、画面一杯の喜びと焦点がはっきりしている絵『こ・こ・が・よ・し』　先生やお友達、保護者の人などに手伝ってもらおうと失格」としている。これに従って入選、入賞、大賞を決めた。審査結果は入選367点。入賞122点、そのうち全国展への大賞（全国 MOA 美術展奨励賞）1点、

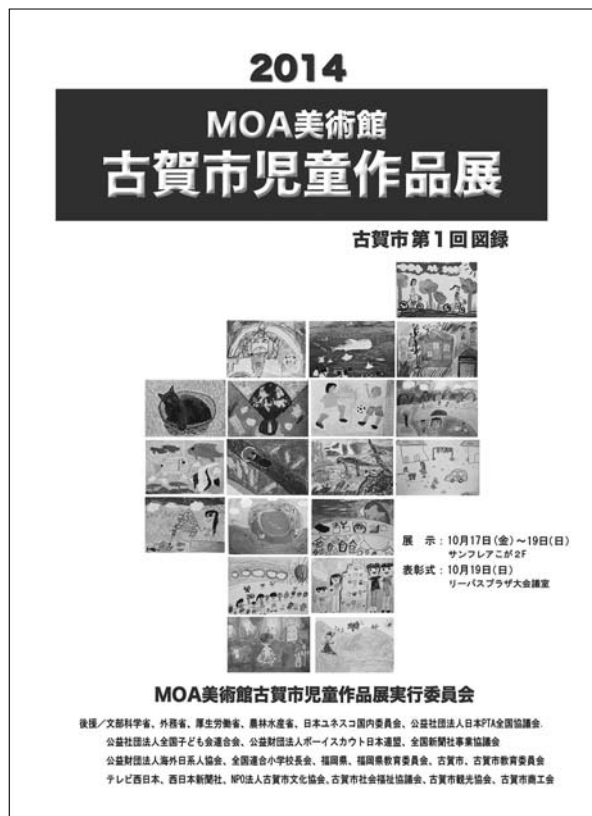


図5.「古賀市児童作品展」図録表紙



図 6 . 図録記事

市長賞や会長賞、局長賞などの特別賞が18点、学校賞1校であった(詳細は次項目『5 3 5 . 表彰について』に掲載)。これに伴い、図録の編集を行い、第1回古賀市児童作品展の図録(全12頁のカラー版)を作成、2,000冊製本印刷した。

5 3 5 . 表彰について

審査の結果、以下のような内容で賞を決定している。()は賞の人数。大賞 MOA 美術館古賀市児童作品展大賞(1) 古賀市長賞(1) 古賀市児童作品展実行委員長賞(1) 古賀市教育長賞(1) 福岡県議会議員賞(1) 古賀市社会福祉協議会会長賞(1) 堤医院理事長賞(1) 西鉄バス宗像社長賞(1) 青柳郵便局長賞(1) 西日本新聞社賞(1) テレビ西日本賞(1) 審査員特別賞(8) 入賞 古賀アートフレンズ賞(27) 美原園賞(20) 社会福祉協議会賞(21) 西鉄バス宗像賞(20) 青柳郵便局賞(16) 学校賞(1) 以上。



図7 . 表彰式

10月19日リーバスプラザ大会議室において表彰式を開催した。表彰者の参加を児童20名(対象者122名)とした。会場が100名定員(法的規則)のため、家族の入場を考慮して決めたものである。賞状および副賞品を渡すにあたって、古賀市長の竹下氏、古賀市教育長の荒木氏、福岡県議会議員の田辺氏、社会福祉協議会会長の渡氏、堤理事長、青柳郵便局長の船越氏を招いた。他の賞の授与に関しては、スタッフの出口



図8 . 表彰(大賞者)

実行委員長、安藤事務局長、宮本 MOA 美術館員、中野審査員が行なった。賞状および副賞を貰った子どもたちは嬉しさ一杯の顔をし、どの子も笑みを浮かべ絵の表現に楽しさや喜びを感じたのではないだろうか。

5 3 6 作品展の状況

10月17・18・19日「サンフレアこが」(歴史資料館)において入賞者122作品の作品を展示した。

3日間で、入場者は、児童を含め、全部で632人であった。作品展においてアンケートを募っ



図9 . 展示会場受付

た。アンケート回答者は111名である。その内訳の年齢は以下の表1 . の通りである。

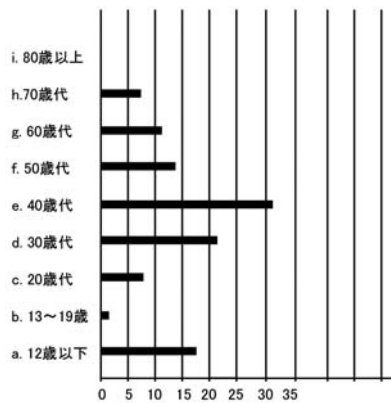


表1．アンケート年齢

40歳代の児童の保護者が多く、30%以上の入場および回答であった。また、展覧会についての評価を書いてもらった。表2の通りである。

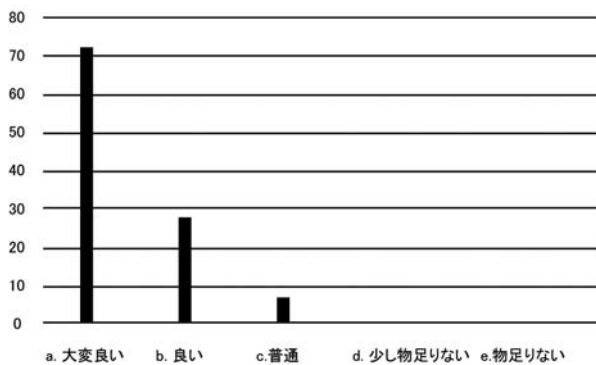


表2．展覧会評価

アンケートの設問に「感想」という自由がきでは、以下のような記入があった。原文、順不同で掲載する。

「すべての作品、すべてうまくかけていた！みんなきれいでいいと思います。どの子も良く感じが出ていました。勉強になりました。自由に描いた子ども達の感性を観れて良かった。絵が出てうれしかった。また行きたいです。展示している作品すべてが個性的ですばらしかった。次は、ゆっくり見に来ます。子どもが来年どのような絵をかこうかと、ず～と考えてはスケッチしたり、色塗りしたりしています。良い時間をもたせていただきありがとうございます。学校単位の競争は必要ないと思う。いろんな名前の

賞があり、それぞれの視点で認定されたと思いますが、大人向けに選定の趣旨を説明していただければ、大人が理解しやすいと思いました。大賞等はすごいと思いました。ふらっと入っただけだったのに、とてもいいものを見せてもらいました。全て見応えのある絵ばかりでした。楽しませて頂きました。それぞれの絵に思いがたくさんで暖かい気持ちになりました。とても良かったです。子供たちを表彰する機会を設けて頂き、ありがとうございます。自信がついてますます絵が好きになっています。子どもさん達の元気で楽しい力作が見れて良かったです。次回も楽しみにしております。形にはまってなく、自由な絵が多かった。ここ数年のものと違った。力作が多くて見応えがありました。ありがとうございました。それぞれが子供らしく、素直な表現で、絵に描かれている。とてもものびのびした絵や上手な絵がたくさんあり、色づかいも子供たちの個性が出ていて良かったです。絵の高さが低学年の方達のが、少し高い様に思いました。小さいお子さんの目線だと、もう少し下げた方がいいかな？。最後のコーナーの高学年の高さが見やすかったです。子供たちの感性がみえて、とても良かったです。小学生とは思えないほど上手な子がいて、びっくりしました。娘が大きくなったら、たくさん書かせたいと思います。みなさん上手に描いていると思いました。初めて見に来ました。とても良かったです。どの作品も、子供らしくて良かつ



図10．展示会場風景



図11．移動展示風景（美原園）



図12．移動展示風景（千鳥苑）



図13．移動展示風景（青柳郵便局）

たです。ありがとうございました。画用紙を丁寧
に扱っている子と、そうでないわくちやの
子がいて残念。賞に出す作品を作るので、子
どもといえ気を遣ってほしい。子供の絵は楽しい
です。色彩が美しく、子供の楽しい思いが表現
された作品が多く、よかったです。

各賞に、いろいろな絵が選ばれていて、選考
された先生方の視点を垣間見ることができ、と
ても楽しい時間を過ごせました。一枚一枚の絵
が心をうち感動しました。お子様の心の表現力
はすばらしいと思います。どれも子供らしくて
良い絵だと思いました。中には、これ親？大人
が手を加えてるよなあ、と思われる絵が見うけ
られたのは残念です。はずかしい。子どもの絵
は心が癒されますね。色の塗り方を工夫してい
て、感心しました。ありがとうございました。
初めてみました。とても子供たちは、よく描い
ていました。どの作品も個性あふれたものばか
りです。素晴らしいもの有難うございました。
1つ1つ行き止まりになっているので、すべて

を通してまわれたらいいかと…。第一回目の古
賀での実行とのことで、ご苦労があったことと
思います。作品をきれいに飾っていただきあり
がとうございます。とても素晴らしかったで
す。今回子供が入選し見に来ましたが、入選の
有無に関わらず、次回も見に来たいと思いま
す。（子供たちを連れて…）図録にしてあるの
は、子供たちの励みになると思いました。子ど
もの絵は、その子の感性そのものが出ていて、
見ていて伝わってくるものがありますね。子ど
も時代は、大好きなもの、楽しいことがたくさ
んあったことを思い出して、その心を取り戻し
たくなりました。おつかれさまです。子供たち
も喜んでいます。みんなすごく絵がうまい！
自由に表現されたものが多く、気持ちよく鑑賞
できました。どの絵画も素晴らしい。夢を一緒
に画いているような…。夏休みの思い出がいっ
ぱいですね。子ども達の一生懸命に描く姿が想
像できて良かったです。みんなのびのびとした
絵で、とても良かったです。全部の作品が個性

的で、のびのびしていると思いました。絵を描いてみたくなりました。子ども達のがのびのびとした絵が、どれも良かったです。皆さんの思いが伝わって来ました。MOA 美術館（いろいろな美術品が集められている）が、熱海にあることは知っていましたが、この作品展とのかかりが分かりませんでした。のぞいてみました。ともかく、子ども達の絵は、見ていて楽しいですね。ありがとうございました。子ども達の絵は、いつ見ても感心させられますね。自分の気付かない目線で、物事をとらえていますね。丁寧によく書けています。どの絵も、子どもらしい表現と色づかいで、良かったです。全ての作品が、個性的でよかった。」以上が感想記述であった。

また、10月30日から翌年3月末までの間、6カ所の施設等に於いて移動展示 <会場> 美原園（図11） 千鳥苑（図12） 西鉄バス、青柳郵便局（図13） リーバスプラザロビー、古賀市1点美術館以上6カ所で行った。（投稿時点では上記会場の3カ所）

事例4．親子で絵画

5 4 1．概要

MOA 美術館古賀児童作品展の1週間後、「親子で絵画」という講座名で行ったものである。その内容については以下のことである。

①主催：つながりひろば（古賀市教育委員会）



図14．「親子で絵画」の風景1

コスモス市民講座 後期

市民持込み企画コース「思いきって描いて親子の絆を深めよう！」

②担当：Qbic の会、古賀アートフレンズ25のスタッフ

③期日：10月26日（日曜日）10：00～11：30

④場所：古賀市リーバスプラザ研修棟

⑤参加者：7組26名の親子が参加
（子ども4歳～12歳）

⑥表現テーマ：(1)「なぐりがき」(2)「かお」(3)「すきなもの」以上の3枚を順に描いた。

⑦準備：親子／絵の具

⑧配布：絵の具、クレヨン、筆、画用紙を希望の親子に無料提供（殆ど全員に配布）

5 4 2．状況

親子で絵を描くことは、日頃めったにないということもあり、また絵を描くことが親子とも好きであるという参加者であった。中に、児童作品展で入賞している子どももあり、それぞれの親子組は熱心に、3つのテーマを楽しく表現していた。

3つのテーマの構成は、最初に行なった「なぐりがき」では、絵に対する緊張感をのぞき、自由に思うままに手を滑らせることにある。クレヨンを使ってぐるぐると円形を描いて、手の感触と柔らかさを出すウォーミングアップであ



図15．「親子で絵画」の風景2

る。児童は、楽しくするが、大人にはやや抵抗があるのか、のびのびさに欠けていた。4歳児の1人が何をしてよいのか分からず「ママ、ママ」と泣き出した。しかしながら、自由にぐるぐるかくことがわかると絵の具と筆を持ち出し、筆に絵の具をたっぷりつけて、ぐるぐるかきだし「きもちいいね」と繰り返して紙が破れるまで3枚描いた。

2つめのテーマは、子どもは親の絵を、親は子どもの絵を描くようにした。子どもが親を思う印象を描き、親は子どもを熱心に観察して描いた。どちらも心がこもった絵であった。3つめのテーマは自由題である。好きなもの何でも描くものとしたが、子どもは、好きな自動車、どうぶつ（うさぎさん）などを描いた。親は、まわりを見て画題を探したり、想像的な絵を描いていた。

指導担当は中野、支援は安藤および「つながりひろば」職員で行なった。

5 4 3 . 考察

親と子が日頃、向き合って絵を描くことはなく、初めてという親子が殆どであった。「こいう機会をつくっていただきありがとうございました。」という声が多くあった。この企画は、子どもを支援するための流れを汲んだもので、「つながりひろば」（古賀市教育委員会）の努力があったからで、実際のところ、この募集は8月から9月にかけて、広報誌で募ったものであるが、締め切りの9月末まで、1組の申込しかなかった。児童作品展後、6組の親子が申し込んできたのである。これを機に、参加する親子が増えるのではないかと期待されるものである。

6 . まとめ

本論における支援報告の中心はプロジェクトにおけるMOA美術館古賀市第1回児童作品展を開催することであった。それに前後して、絵画教室や工作教室、親子教室を行い、作品展の

支援を有効にするものであった。この活動に於いて児童の絵画表現する喜び、その過程を垣間見ることができた。そのひとつに、表彰状における児童の笑み、喜びを感じ取ることができた。また来年へ臨む期待感もあった。作品展では、入場者が600人を越え、（実数623人）家族で子どもたちの絵を見ている姿は微笑みが見られた。

最も残念であったことは、表彰する児童の参加者を限定したことである。今回の会場定員が100名と定められており（法的定員）児童と参加する家族を考えると20名程度の児童しか入れないことになった。次回からは入賞者全員とその家族の300名以上収容できる会場にしたいとスタッフ全員の意見であった。また、計画を実践するにあたって、会場は1年前より予約をしなければならず、今回は約半年前ということから始めたため、来年への反省となった。

最後に、肝心の子どもたちへの対応では、この美術を通したプロジェクトによる絵や工作の実践は、一個人の活動ではなく、幼稚園や小学校、NPO法人団体等の協力の下に、重ね重ね支援活動を行い、連続性を持たせ、成長を願うことにあると痛感した。今回の支援活動は初めて試みたもので、記述について不明瞭な点もあるが、今後ともこの活動および報告を記述していきたいと考えるものである。

本文註記

1. イギリス、ヨークシャー生まれの詩人、文芸批評家、美術批評家。ロマン主義の作風で知られる。第一次世界大戦に従軍した後は美術評論家としても活動する。また1953年には、イギリスの文学への貢献からナイト爵を授与されている。美学・美術史研究やシュルレアリスム研究に代表されるように、同時代の美術動向へ批評的言説から深く関与した。また、美術教育の領域においては、その主著として『芸術による教育（Education through Art）』で自身の美術教育研究を理論的に集成している。そして、この著作は、日本の戦後における小学校図画工作科の教

育及び美術科教育の理論形成に大きな影響を及ぼし、貴重な思索のひとつとなっている。

2. オーストリアのリンツに生まれる。ウィーンの専門学校において美術制作、ウィーン大学において美術史と心理学を学んだ。その後、アメリカに渡り、ペンシルヴァニア州立大学にて美術教育部長の座に着いた。翌年に彼が出版した著書原著“Creative and Mental Growth”は、戦後の世界の美術教育で最も影響力のある著作として知られている。我が国においても、その著作の改訂第三版が『美術による人間形成 創造的発達と精神的成長』（竹内清・堀ノ内敏・武井勝雄訳／黎明書房）という表題で翻訳され、その邦訳書は、戦後の美術教育の理論と実践の礎となり、現在においても美術教育の基本図書の一つとなっている。児童生徒の発達段階に即した一貫した美術教育の実践的、体系的な指導書である。ローエンフェルドは「初版序」の中で、本書執筆の目的について、「子どもは生れながらの芸術家であり、創造のためには、ただ材料さえ与えてやれば、ほかには何もいらない」といった理想主義的な考え方が、児童の創造的な衝動を無視するのと同様の弊害を美術教育に与えているとし、子どもの精神的、感情的成長と創造的な表現の関係を明らかにすることにより、子どもの要求に合った、柔軟性に富む美術教育の方法を導き出そうとしたものであると述べている。

3. 日本人、東京生まれ。宗教家、文明評論家、書家、画家、歌人、華道流祖、造園家、建築家、美術品収集家。世界救世教、箱根美術館、救世熱海美術館（現：MOA美術館）などを創設した。自然農法の創始者としても知られる。全人類の病貧争からの脱出（健康の実現、貧苦からの脱出、安全の実現）を基礎として、新文明世界（＝地上天国、理想世界）を創造することを目指した。新文明世界は3つの活動理念「精神性」「美」「自然力」を培い発展させることによって達成されると説いた。

写真掲載について、撮影時に被写体になった方々の承諾を得ている。

参考文献

- ・ハーバート・リード著、植村鷹千代・水沢孝策共訳「芸術による教育」美術出版1953
- ・ヴィクター・ローエンフェルド著、竹内清・堀内敏・武井勝雄共訳「美術による人間形成」黎明書房 1963
- ・島崎清海編「美術による教育」博文社 1979
- ・城戸幡太郎、周郷博、井手則夫監修 新しい画の会編集「幼児画の指導」小山書店 1956
- ・V. ローエンフェルド著、勝見勝訳「子どもの絵」白揚社 1956
- ・北川民次著「子どもの絵と教育」創元社 1953
- ・ローダ・ケロッグ著、深田尚彦訳「児童画の発達過程 なぐり描きからピクチュアへ」黎明書房 1973
- ・多田信作著、幼年教育講座7「絵の教育」黎明書房 1973
- ・MOA美術館 <http://www.moaart.or.jp> 2014
- ・<http://www.ambitious.pref.fukuoka.jp/>

写真撮影

- ・中野隆二、図1、図2、図3、図4、図11、図12、図13、図14、図15
- ・安藤 徹 撮影 図7、図8、図9、図10